⑧兵庫教区での体験から

兵庫教区には、今はどうなっているか詳らかではないのですが、伝道委員会の中に各種伝道委員会というのがあり、そこが障がい者問題を取り扱っていました。ある年の協議会でのことでした。フロアと発題者とのディスカッションの場で、ある牧師が、他の人の発言について告発的とも言えそうな厳しい批判を発言されました。そのとき私は司会をしていたのですが、この今の発言について、発題者はどう感じるかと聞くと、発題者であった障がい者から、自分の教会の牧師の告発的な発言について極めて不愉快、との不快感を示されたのです。この場面は、批判的発言の内容はある意味で真理性を持っていたと思うのですが、どこかに「私は差別者ではなく、あなたの意見は差別的だ」というような無意識の批判が働いていたのではないでしょうか。ですから発題をされた障がい者はこのような発言の奥に隠れた意識を敏感に感じられたのではないかと思うのです。ですから、障がい者問題はいつも差別の問題が指摘されはするのですが、それが互いにその差別性を告発するような場面は建設的でないように思います。むしろ、謙虚に語り、謙虚に耳を傾けるという場面であることが必要なのだと思いました。教会にはどこか、自分は差別者ではない、と思いこんでいるところがありますし、一方その差別性を告発することによって、逆に自分が差別者ではないと装うような面があるのかも知れません。そうではなく、厳しい対論もありつつ、己の内に秘めていて気づいていない差別性に気づき、そして福音的信仰においてそれはどのように克服されるべきなのかを共に考えて行く共同の場であることが求められているように考えるのです。それが懇談会という表現でもあるのです。

このことは、必ずしも、アーモンドの会の委員や、集うてくる全ての人々すべてに共有された意識であるとも言えません。まだ、途上にあると思います。

その兵庫教区での協議会で、私は非常に印象を受けたことがあります。それは、出席されていたある女性が、その女性は自分の子どもが重い障がいを負っていたのですが、このように発言したのです。

『以前、私は自分の子どもの障がいを受け入れることができませんでした。ですから人前に出さないように、隠そうとしていました。しかし、さまざまな体験をへて、今では、この子の障がいを隠すのではなく《受け入れて》、むしろ《角（つの）のように前面に突き出すように》生きています。』

これはまだ障がいが社会的にどこか受け入れられていない現状に対する、ある意味で闘争的な姿勢の現れです。まだ、どこかに武装しなければ突破出来ないなにかが世間にはある、という事実認識です。今まで隠そうとして必死で生きて来たこの女性の反転した姿勢であったのかも知れません。戦わなければこの社会は頑迷で、差別的で排除的で、ハードルは極めて高いのだ、という意味であったのではないでしょうか。課題はここから発展して行くのです。